



Title	景気変動の理論
Author(s)	大谷, 龍造
Citation	大阪大学, 1977, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/31716
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名・(本籍)	<small>おお</small> 大 <small>たに</small> 谷 <small>りょう</small> 龍 <small>ぞう</small> 造
学 位 の 種 類	経 済 学 博 士
学 位 記 番 号	第 3 8 3 0 号
学位授与の日付	昭 和 52 年 3 月 10 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
学 位 論 文 題 目	景気変動の理論
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 建 元 正 弘 (副査) 教 授 熊 谷 尚 夫 教 授 小 泉 進

論 文 内 容 の 要 旨

第 1 章で、景気循環が経済学者によって発見され、その理論が形成され始めた時期の学説史的概観を試みた。特に、ツガン＝バラノウスキー、シュピートホフ、アフタリオンの理論的立場の差を明らかにすることによって、現代景気理論の背景を構成しようとした。

第 2 章では、現代景気理論の基本的構成要素になっている乗数理論と加速度原理の説明と、両者の結合によってモデル分析的立場が確立された事情の概説をすると共に、投資誘因をめぐる諸問題についての若干の考案を行った。この投資誘因についての考察は、後の非線型景気理論への布石を意図したものである。

第 3 章では、景気循環の研究を行うにあたって必要な景気循環の種類についての概観を試みた。在庫循環については、追随性と共に先行性をも考える必要がある。再投資循環は、全くの物理的な関係としてとらえるのは適当ではない。シュムペーターの革新説は、不況に資本主義の活力の源泉を求めている点に注目しなければならないし、それとの関係で考えるとき長期波動の周期性は余り強調されるべきではなからう。

第 4 章では、いわゆる消費関数論争の展望を試みた。習慣性仮説、流動資産仮説、恒常所得仮説は、いずれにも一長一短があり、単一仮説でマクロ的な消費行動を説明することは出来ない。個人の消費行動が全くのでたらめでもなければ、完全に理性的とも言えないことを考えるならば、このことはむしろ当然である。消費行動は、広い意味での履歴性を最も強く反映すると考えられるために、流動資産にしても過去の保有量と現在との関係が問題にならう。

第 5 章では、景気変動の線型モデルの展望が行われる。モデル分析による最初の景気理論は、フリ

ッシュやカレツキーによる微分定差混合方程式によって提示されたが、取扱いの複雑さのわりには殆どその代価とも言うべき収穫がない。戦後、主としてグッドウインとフィリップスによって展開された微分方程式を使つての景気変動分析は、タイム・ラグを排除するところに無理があると言わなければならない。結果的には、定差モデルが中庸を得ていると言えよう。ただ、定差モデルは消費ラグと投資ラグとを同じと考えるところに制約がある。

第6章では、カレツキー＝カルダー型の非線型景気循環モデルの静学的モデルの概説に始つて、循環的成長モデルの展望と展開が試みられる。この型の非線型モデルを最初に提示したのは、カレツキーの1937年の論文であり、そこでは投資決意量と投資実現量との関係において景気循環がとらえられた。その改訂版である1939年の論文において、始めて国民所得の関係としての投資の変動として景気循環がとらえられるに至った。しかし、非線型に対する考察は、なお不十分なものであった。

この型のモデルの特性を真に明確にしたのは、カルダーの1940年の論文であった。まず、彼は、カレツキーが必ずしもはっきりとは意識してはいなかった貯蓄関数を明確にした。更に、中程度の国民所得水準においては、景気循環内の視点に立つ企業の予想の弾力性が1を超えるために、投資関数と貯蓄関数とが不安定的に交叉する。この型のモデルを真の非線型モデルにするのは、S字型の投資関数が貯蓄関数とそのような関係にあることである。

原型のカルダー＝モデルを循環的成長モデルにすべく提示されたのが森嶋モデルである。森嶋モデルは、基礎消費が時間の増加関数であり、それに応じて貯蓄関数が移動することに成長の要因を求める。けれども、投資関数の移動は、原型のカルダー＝モデルの様式を踏襲するために、投資関数が再投資水準に対して次第に下方に移動することになり、循環的成長が一定の段階まで進行すると循環的変動が停止してしまい、以後は基礎消費の増大に対応した移動均衡的成長が展開されることになる。

こうした欠陥を補正すべく提示されたのが安井モデルである。安井モデルにあつては、静学的循環にあつても投資関数の折点の軌跡が再投資水準の軌跡と平行であることが主張され、加えて、循環的成長過程にあつては投資関数が上方に伸長する。しかし、利潤を最大の誘因とする投資が技術進歩を実現するために何故に投資が不連続的に増大するのかは、必ずしも説得的ではない。更に、安井モデルでは国民所得＝投資比率が長期的に安定しているという事実を説明しにくい。こうした統計的事実と符合するように、カレツキー＝カルダー型モデルの枠内での考察が試みられる。

論文の審査結果の要旨

本論文はいわゆる「循環的成長」という歴史的事実を強く意識し、これを説明する独創的な大谷モデルを開発提示し景気変動に関する巨視的動学を一步前進させたものであり、学説史的に忠実、数学的に厳密でありこの分野の研究水準向上に貢献すること大である。従つてこの業績は経済学博士の学位に十分値するものと判定する。